

吉野川歴史探訪 語りつぐべき大洪水「寅の水」

こんにちは。別宮川三郎です。いよいよ台風シーズンとなりました。私たちが住む徳島平野では、幸いにして、約90年にわたり吉野川堤防の決壊による激甚な水害は発生していません。

しかし、大正以前の吉野川は洪水と水害の歴史でした。慶応2年(1866)の「寅の水」は蜂須賀家入国以来の大洪水とされています。また、平成28年(2016)8月7日は「寅の水」から150年の節目となります。

このような大洪水は必ず発生することを前提に備えなければなりません。皆さんの洪水や水害に対する意識はどうでしょうか。「水害を我がこととして捉える」ためにも、今回は「寅の水」など過去の大洪水と水害について探訪しましょう。

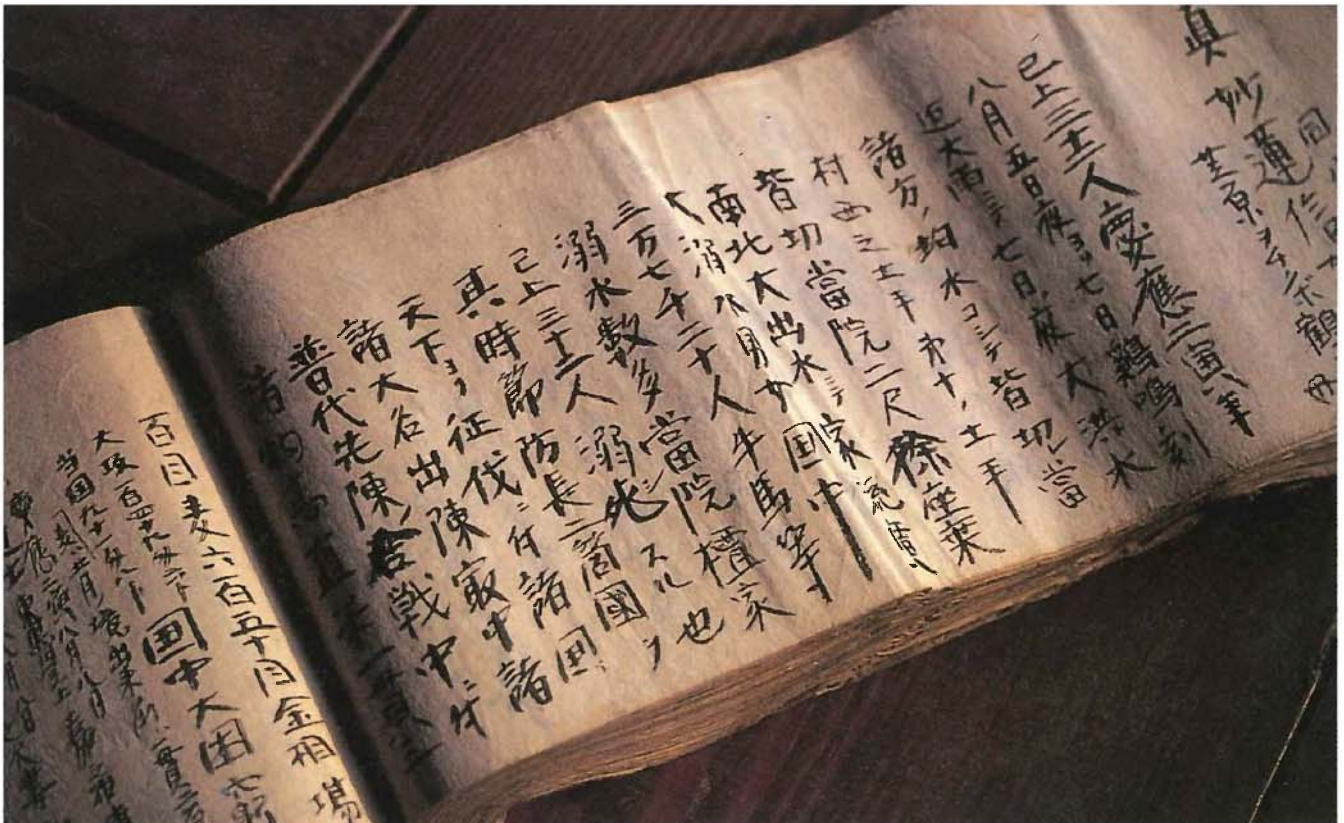


写真1 蔵珠院 「寅の水」による被害の様様を書いた過去帳 四国三郎物語P33

慶応2(1866)寅年、8月5日の夜から7日の明けがたまで大雨となり、7日の夜に大洪水となった。

村の西の土手や第十の土手が切れ、当院でも床上2尺あまり(約60cm)まで浸水。

南や北でも大出水し、家は流され、国中で37020人の男女や牛馬などが溺死(できすい)。

壇家のうち32人が溺死した、とあります。

1. ちょうど 150 年前、幕末の動乱期に発生した前代未聞の大洪水

慶応2年（1866）8月の洪水は、四国をはじめ、近畿、中部、関東から東北に至る全国的な水害となりました。また、この年が寅年であったことから、後年、この洪水を「寅の水」とか「寅年の水」と呼ぶようになりました。

阿波でも、「当国御討入以来之水」と言われるほど記録的な洪水に見舞われ、各地で被害が続出しました。慶応2年は倒幕を目的とした薩長同盟が成立し、これに対して幕府が第二次長州征伐を行った年です。阿波徳島藩は2年前の元治元年（1864）の第一次長州征伐で「四国の先鋒」を命じられ、慶応2年にも出兵要請があったそうです。しかも、それ以前には安政の大地震や干ばつ、疫病などの天変地異が続いていました。寅の水は、それに追い打ちをかけるように起こった未曾有の大水害でした。

記録によれば、7月末から降り続いた雨は、8月5日夜から7日の明け方まで大雨となり、7日の夜に大洪水となりました。連日連夜の豪雨により吉野川の水量は膨れ上がり、土地の高いところでも床上2～3尺（約60～90cm）、低いところでは天井に達するほどの浸水でした。家や牛馬が多数流され、避難民は舟に乗り移りましたが、四方海のごとく生死のほども知れず、ところどころに救助を求める声が哀れであったと伝えられています。凄まじい大洪水だったのでしょう。各郡がまとめた死者を合計すると1万余人（吉野川百年史）とも言われています。

2. 蔵珠院に残る痕跡と記録が示す凄まじい大洪水「寅の水」

「寅の水」の痕跡が、今でも徳島市国府町芝原の蔵珠院（写真2）に残されています。これは、茶室（写真3）の板戸に残されたシミで、それを見ると床上2尺（約60cm）まで浸水したことがわかります。

さらに、その時の被害状況を記録した過去帳（写真1）には、村の西の土手や第十の土手が切れ大出水となり檀家のうち32人が溺死したと記録されています。



図1 蔵珠院位置図

「この地図は、国土地理院の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。
(承認番号 平27四復第67号)」



写真2 蔵珠院（徳島市国府町芝原）



写真3 蔵珠院 茶室

また、蔵珠院の山門前に「寅の水」の最高水位を示す標柱（写真4）があります。これは、この洪水の恐ろしさを後世に長く伝えようと、今から約20年前の平成7年(1995)に吉野川文化研究会と北井上文化財保勝会が共同で建てたものです。

この標柱の痕跡を、レーザープロファイラーによる標高観測結果や洪水の氾濫流計算結果と比較(図2)すると、標柱の痕跡水位は地盤から2.6mを示していますが、標柱が建つ場所は周辺の畑より1m程高くなっており、周辺地盤からの標柱痕跡の深さとしては、約3mから4mになります。

なお、国土交通省徳島河川国道事務所では、想定最大規模(1/1000以上)や計画規模(1/150)による降雨が、現在のダムや河川の整備状況で発生した場合の浸水想定区域を平成28年5月末に公表しています。

(事務所ウェブサイトトップページ)

防災情報 → 浸水想定区域図・ハザードマップ →

吉野川水系吉野川、旧吉野川・今切川洪水浸水想定区域図の順にアクセス



「寅の水」が発生した幕末とでは、堤防の整備状況や川底の高さや形などが大きく異なるため洪水の規模は一概に比較できませんが、それでも、「寅の水」の痕跡水位は、計画規模(1/150)降雨の発生に伴う浸水想定区域の浸水深さに匹敵する大洪水であったことが伺えます。

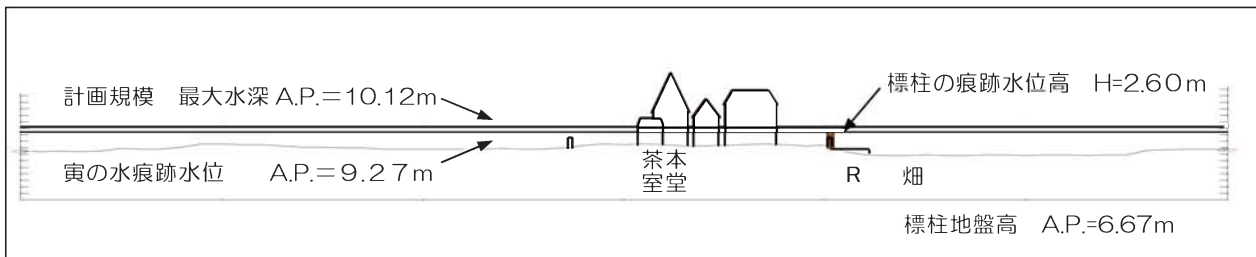


図2 蔵珠院周辺における「寅の水」痕跡水位

この標柱は、江戸時代末期に起こった吉野川の大洪水による氾濫水位を示したものです。そしてこの洪水は地元では、「寅の大水」として語り継がれています。「寅の大水」は、慶応二年(一八六六)寅の年に発生した大洪水であり当院の「過去帳」に洪水の様子が記されています。それによりますと芝原第十の堤防が全壊し、当院の壇家で三十二人もの方が亡くなりました。また院内の板襖や壁には当時の痕跡が残っています。

これらの資料は、吉野川に関する貴重な遺産であると考え、後世に伝えるべく建立するものです。

平成七年十二月

吉野川文化研究会

北井上文化財保勝会



写真4 蔵珠院山門前の標柱

3. 幕末の天変地異。古記録が物語る大災害の数々

吉野川の洪水記録は、平安時代の二大洪水として、仁和2年(886)、承徳2年(1096)の大洪水があったとされています。

その後は、藩政期の記録が主となり、万治2年(1659)から慶応2年(1866)までの2百年間に阿波国内で約100回の洪水記録が残されています。

そのうち、幕末には慶応2年(1866)8月の「寅の水」の他、大災害の記録が多く残されています。まさに、20数年の間に、洪水、干ばつ、地震、洪水が続く「幕末の天変地異」と呼ばれるもので、その災害概要について説明します。

○天保14年(1843)の「七夕水」

7月初めの洪水で「七夕水」と呼ばれています。「50年来の大水」といわれ、「川内村史」によれば、7日朝から翌朝までの雨は、酒の6尺桶に2杯も溜まったといわれています。この時の洪水は、阿波に降った集中豪雨によるもので「御国水」と呼んでいました。

「御国水」とは、阿波領内に降った雨により起こる洪水を指します。これに対して、阿波国は天気か小雨なのに、上流の土佐で大雨が降り洪水が急襲するものを「土佐水」とか「阿呆水」と呼んでいました。

○嘉永2年(1849)の「酉の水」

「七夕水」の水害から僅か6年後、「酉の水」と呼ばれる洪水が発生しています。

この洪水は、「蜂須賀家記」によると「水は勝瑞村一円に溢れ人家が漂流した」とあります。また、板東村(鳴門市大麻町)で堤防が百間(約180m)決壊し水位が7尺(約2.1m)に及んでいます。なお、徳島市川内町では堤防33箇所が決壊。河口域の鶴島、宮島、富吉、富久、米津の堤防は内側からの増水で決壊したため海水が侵入しました。さらに、山川町では川田堤防が決壊し、三好郡代所の調べでは死者250名を記録しています。このように各所で激甚な水害が発生しています。また、この洪水は、嘉永2年が酉年であったことから「酉の水」と呼ばれています。

○安政元年(1854)の大地震「安政南海地震」

「酉の水」から僅か5年後、前年の嘉永6年(1853)は日照り続きで干ばつによる被害が発生していました。洪水と干ばつによる被害が繰り返し発生するなか、嘉永7年(1854)に大地震が発生しました。その被害は、徳島平野にも及んでおり、松茂町中喜来の春日神社境内にある石碑(敬諭碑)(写真5)がこの時の惨状を伝えています。

突然の揺れによる家屋の倒壊と火災、津波による田畑の冠水のほかに、碑文で特に注目されるのは、大地から水が噴き出したことが記載されていることで、今でいう「液状化現象」にほかなりません。また、村民たちは恐怖と流言飛語に戸惑う一方で、お互いに助け合って避難生活を送ったとあります。

なお、この地震は嘉永7年(1854)に発生しましたが、これを契機として年号が「安政」へと変わったため「安政南海地震」と呼ばれています。



春日神社



写真5 春日神社境内にある敬諭碑（松茂町中喜来）

○安政4年(1857)の「八朔水」

安政南海地震から3年後、安政4年(1857)の洪水は「八朔水」と呼ばれています。「八朔」は陰暦8月1日のことで、この洪水が7月29日から降り始めて8月1日に豪雨となったので、「八朔水」と呼ばれています。吉野川（現在の旧吉野川）では堤防が決壊し鳴門市大麻町板東周辺一帯が浸水しました。また、別宮川も増水により鈴江堤防が決壊し洪水の氾濫により川内町305戸の家屋が倒壊しました。

みなさんどうでしたか？伝え聞いている災害はありましたか？ほとんどの方がご存じなかったのではないかと思います。

今年は、「寅の水」から、ちょうど150年を迎えます。私たち大人はこの機会を捉えて、**洪水・地震などの凄まじい大災害の先人たちが残した貴重な防災メッセージを、大切な子供達や子孫の命だけは救えるように、後世に語りつぐ必要がある**と思います。

次回は、毎年のように発生する洪水被害を少しでも軽減するため命をかけて造った堤防（けんもつてい監物堤など）、「水除け争い」の決着を図った「印石」、洪水の危険をけいしやう警鐘するたかじやう「高地臆」など、洪水と闘う住民の姿を探訪しましょう。